

同志社大学  
2016年度 卒業論文

両親の離婚経験をもつ子どもの健康的な自己愛についての研究

社会学部 社会学科  
学籍番号：19131034  
氏名：宮門 和泉  
指導教員：立木 茂雄

(本文総文字数：27,398)

## 要旨

### 両親の離婚経験をもつ子どもの健康的な自己愛についての研究

学籍番号：19131034

氏名：宮門 和泉

本研究は、離婚経験のある子どもが、各発達段階においてどのような過程を経て、自己愛を発達させるのかを明らかにするためのものである。先行研究は、エリクソンの発達理論とコフトの自己愛理論、そしてこれらの理論に基づき発展された研究を用いた。データとしては、大学生 A の誕生から現在に至るまでのエピソードを記録し、そのデータについてコレスポンデンス分析を行った。コレスポンデンス分析の結果、両親の離婚経験の有無に関わらず、乳児期、早期児童期、乳児期などの各発達段階に合わせた重要な他者との密接な関わりがあれば、子どもの自己愛は育成され、発達課題を達成できるということが明らかにされた。現状として毎年 20 万人以上増えているとされている、両親の離婚経験を持つ子どもたちが、非離婚の子どもたちと変わらない環境で健康的な自己愛を育むためには、親族を含めた家族や教師、友人、パートナーなどとの相互的な関係を築き、プラスの影響を受け、与えることが重要である。

キーワード：離婚経験のある子どもの発達 健康的な自己愛 重要な他者

## 目次

1. はじめに
2. 先行研究
  - 2.1 エリク・H・エリクソンの発達理論
  - 2.2 エリクソンの発達理論を使った先行研究
  - 2.3 ハイイツ・コフートの自己愛理論
  - 2.4 コフートの発達理論を用いた先行研究
3. 研究方法
  - 3.1 調査対象者
  - 3.2 実施時期
  - 3.3 調査内容とデータの情報収集方法
  - 3.4 キーワードのタグ付け
  - 3.5 タグのカテゴリ化
  - 3.6 分析手法
4. 分析結果と考察
  - 4.1 分析結果
  - 4.2 乳児期における分析結果と考察
  - 4.3 早期児童期における分析結果と考察
  - 4.4 遊戯期における分析結果と考察
  - 4.5 学齢期における分析結果と考察
  - 4.6 青年期における分析結果と考察
  - 4.7 初期成人期における分析結果と考察
5. おわりに
  - 5.1 まとめと今後の課題

参考文献

## 1 はじめに

厚生労働省によると、2015年の離婚件数は22万6198組で、前年の22万2107組より4091組増加した。離婚件数の推移は、1964年以降毎年増加を続け、1984年から減少していた。1989年以降は再び増加していたが、2002年の28万9836組をピークに現在に至るまで減少の傾向にある。2015年の離婚率(人口千対)は1.80で前年の1.77より上昇している。また、2011年時の親権を行わなければならない未成年の子の有無別離婚件数は25万1,378組で、親が離婚した未成年の子の数は25万2,617万人であった。親が離婚した未成年の子の率(20歳未満人口千対)は11.12%である。これらの結果・推移から、全体としての離婚件数は減っているが、離婚を経験した子どもの数は毎年20万人以上増えていることが分かる(厚生労働省 2015)。

近代家族モデルでは、両親と子どもという体系が一般的だとされてきた。しかし、毎年一定数の離婚件数があることや、総務省によると、2010年時点の日本の世帯で最も多い人員構成は単独世帯であると統計で示されている(総務省統計局 2010)。このような現状の中、近代家族モデルが一般的な家族モデルだとはもはや言えない。したがって、近代家族モデルでない構成の家族モデルについて研究を進める必要があると筆者は考える。

本論のテーマは、母子家庭で育った子どもの自己愛と発達についてである。本論文を書くきっかけは、筆者自身が母子家庭で育った大学生Aとの出会いである。Aが小学4年生の頃、両親が離婚したが、母はまだ年齢も若く、仕事でキャリアを積むことを大切にしていた。したがって、母は娘であるAを実家に預け、5年ほど単身赴任をしていた。その後、Aが中学2年生の時、母は仕事を辞め、地元でエステ店を開業し、現在も続けている。このような経緯から、Aは、祖父母や叔母、5人の従弟と暮らし、多くの親戚に囲まれながらこれまで生活してきたようだ。母からも必要な教育費をもらっていたため、周囲からのサポートを受けられない母子家庭よりも恵まれた環境で育ち、両親のいる家庭の周りの友人と変わらない生活を送っていたとAは述べる。両親の離婚は子どもの発達に影響を与えるという一般論がある中で、Aのこのような発言は筆者にとって興味深いものであった。

エリック・H・エリクソン(1958=1987)の発達理論では、各発達段階で達成しなければならない課題があり、その課題を達成していなければ、次の発達段階での課題を達成できないとされている。

また、野口康彦(2013)は次のように述べている。

子どもの心理発達は、主として母子関係が基礎となり展開する。母子相互の関係の軸となるのは、母親の内側にある倫理規範であるが、それは自身の生きる指針でもあり、子どもは母親の生き方を取り込んでいくことで、母子相互関係を成立させている。(野口2013:9)

野口は、子どもの心理発達の基礎は母子関係だと述べている。しかし、Aが産まれた当時両親は大学1年生で、卒業後は他の同級生と変わらず働いている。Aの幼少期の話を聞く機会もあったが、両親よりも祖父母や叔母ら親族が関わっているエピソードのほうが多かつ

た。したがって、筆者自身の体験から、両親の離婚や野口の述べるような母子相互関係が薄い場合でも、重要な他者をはじめとした周りの支えを受け、自己肯定感を十分に得ることができれば、健全で幸福に発達することができるのではないかと筆者は考えている。この仮説を実証するために、本論文を執筆したい。

## 2 先行研究

### 2.1 エリク・H・エリクソンの発達理論

#### (1) エリクソンによる発達理論の概要

まず、本論で核となるエリクソンの発達理論について説明したい。エリクソン(1958=1987)は、乳幼児期から成熟期までの人間の発達を8段階に分け、人間は生涯を通じて発達すると考えた。また、健康なパーソナリティを築く上で達成すべき課題を8つの各段階で設定し、それぞれの段階に応じた経験や学習を行うことで得られる特性について述べている。反対に、各段階で設定された課題に対して、十分な経験や学習が行えなかったときには発生するであろう「危機」についても報告されている。そして、それぞれの発達段階で遭遇する葛藤を解決することで初めて次の段階に進むことができるとエリクソンは考える。つまり、乳児期から始まる課題を達成していなければ次の段階の課題を達成することはできないということである。以下の表1は、エリクソンの発達理論を元に、各段階での課題と危機をまとめたものである。

表1 各発達段階での課題と危機

発達段階	課題	危機
乳児期	基本的信頼	基本的不信
早期児童期	自律性	恥と疑惑
遊戯期	積極性	罪悪感
学齢期	生産性	劣等感
青年期	同一性	同一性拡散
初期成人期	親密性	孤立
成人期	生殖性	停滞
成熟期	完全性	絶望と嫌悪

(エリク・H・Erikson, 1987,小此木啓吾訳 『自我同一性—アイデンティティとライフサイクル—』を参考に筆者作成)

#### (2) 乳児期の発達課題

乳児期の課題である基本的信頼とは、他人や自分を信頼に値すると感じられることである。生理的・心理的欲求を母親から満たされることで、子どもは母親に対して基本的な信頼感を得ることができ、自律するための準備を始める。一方で基本的不信とは、他人や自分に対して信頼することができず、自分自身や他人とうまくいかなくなり自分の中に引きこもることである。乳幼児期の子どもの特徴としては、何でも取り入れることと、敏感で傷つきやすいことが挙げられる。この時期の子どもが基本的信頼感を獲得するためには、口や目・触覚に対して、適切な時期に適切な強さのものを与えるように配慮しなければならないともエリクソンは述べている。具体的には、授乳させることや抱かれる・ほほ笑み

かけられる・あやされる等の行為による喜びを感じることである(エリクソン 1958=1987)。

### (3) 早期児童期の発達課題

遊戯期へ移行する前段階が、早期児童期である。この時期は第一次反抗期に当てはまり、乳児期に獲得した基本的信頼感を持った上で、どれほど反抗しても母親との関係が壊れないかどうかを試す期間である。子ども自信が母親と自分との関係の深さを再確認すること、そして子どもが自分自身で立ち上がろうとしている姿を周りが応援することで、自分が一人の人間だと確信できる「自律性」を獲得することができる。一方で、これらのことができなければ、他者や自分に対する信頼を失い、自分は未熟で愚かな存在としてさらしものにされているという「恥と疑惑」の感覚に陥ってしまうとエリクソンは述べている(エリクソン 1958=1987)。

### (4) 遊戯期の発達課題

遊戯期には、言語と移動能力が急速に高まるため、自分で夢見たことや考え出したことを積極的に主張するようになる。この行動を十分に行うことで、「積極性」を達成することができる。しかし、どんどん主張したことにより大きく傷ついた経験を持つと、自分は罰を受けるのではないかという「罪悪感」の強い子どもになるとエリクソンは述べる。また、男子は正面攻撃によって自分のやりたいことを主張し、女子の場合は自分を魅力的にすることで相手を引き付けようとするという違いがあるとも報告されている(エリクソン 1958=1987)。

### (5) 学齢期の発達課題

小学生の年代である学齢期は、両親や教師の言うことを理解し、従うことを学ぶ時期である。なぜ親に怒られたのかを理解し、人に従うことに疑問を抱かず我慢をして良い子になるという特徴がある。この時期には、自分が誰かの役に立っている・ものをつくり、より良くできる・完全にできるという感覚をもち、仕事を完成させる「生産性」の喜びを身につけることが必要である。生産性を獲得するためには、両親や教師から言われたことに対して自己抑制と義務感をもって取り組むことや、遊びを通してやりたいことを見つけ、やるべきことを学ぶことをバランスよく取り入れなければならない。もしバランスが崩れてしまえば、命令された義務に依存する態度や、何も学ぼうとしない無気力な態度、やりたいことをやることは義務だと感じる態度がみられるようになる。やりたいことをやる義務について、エリクソンは『「先生、今日も僕たちがやりたいこと **want to do** をやらなければならない **must** の？」』(エリクソン 1958=1987: 103) という子どもが気づかわしげに発した会話に例えている。生産性を身につけられない場合には、知識より母親を必要とする・家で赤ん坊のままでもいいなどの劣等感の危機に直面することになる(エリクソン 1958=1987)。

### (6) 青年期の発達課題

やがて中学校に入学する前後で、子どもは思春期を迎え、学齢期に作られていた抑圧態勢が失われ、自分は親の望みに応えられないのではないかと葛藤し始める。子どもの体験した葛藤が学齢期には安定していた親子関係に影響を与えるようになる。思春期には、子

どもは親の価値観や生き方を見て、自分の価値観に取り入れたり修正したりするが、親の価値観や生き方に矛盾が多くあればあるほど、子どもはそれらを自分にうまく取り込めず、反社会的な行動をすることで親の生き方を批判する場合がある。

この段階である青年期では、自我同一性を獲得することが課題となっている。エリクソンは、自我同一性の感覚を「心理学的意味での個人の自我が他者に対する自己の意味の不変性と連続性に合致する経験から生まれる自信」(エリクソン 1958=1987: 112) と定義している。つまり、自分はこれまで一貫してありのままの自分であり続けたということ、そして、社会的に役目を果たし、社会から認められていることへの自信を持つことである。一方で、偽装の見せかけの役割を演じたり、他者と全く同じ役割を強制させられたりすることで、同一性の感覚を身につけられず、自分が誰なのかが分からなくなり、非行や精神病の発生につながる場合があるとエリクソンは述べる。これを、「同一性拡散」という青年期の危機だと定義されている(エリクソン 1958=1987)。

#### (7) 初期成人期の発達課題

初期成人期では、友人やパートナーとの出会いが発達において重要になる。自分のことを愛してくれる重要な他者を見つけ、魅力や愛情を注ぎ、注がれることで親密な関係や相互的な関係を築くことで、「親密性」を獲得することができる。また、青年期で自己同一性に確信を持てば持つほど、自己肯定する気持ちを持ちながら、より親密な関係を築けるとエリクソンは述べている。逆に、青年期に同一性を確立させることができなければ、他者と親密になることを恐れ、形式的な人間関係しか見いだせなかったり、対等な関係が築けなかったりすることで、孤立の危機に直面する場合がある。重要な他者は異性に限定されてはいないが、この時期には、異性との関係において「親密性」を育むことは重要だとエリクソンは述べている(エリクソン 1958=1987)。

#### (8) 成人期の発達課題

成人期の発達課題は、生殖性である。エリクソンの言う生殖性とは、「自分たちのパーソナリティとエネルギーを、共通の子孫を生み出し育てることに結合したい」(エリクソン 1958=1987: 122) という願いを発達させることである。すなわち、ただ子どもを持つ・持ちたいという事実ではなく、次世代を育てていくことに対して興味を持つことである。また、結婚して子どもを育てることが生殖性を獲得する唯一の方法ではなく、自分の特別な才能を活かした芸術や知識などを社会に与えることも方法の1つとしている。しかし、これらのことを出来なければ、自分本位になり、子どものように自分のことばかり考えるようになると人格の停滞状態に陥り、発達課題をうまく乗り越えることができない(エリクソン 1958=1987)。

#### (9) 成熟期の発達課題

成熟期の発達課題である完全性とは、「自分の人生は自分自身の責任であるという事実を受け容れること」(エリクソン 1958=1987: 123) と定義している。つまり、自分自身がこれまでに作り上げたライフサイクルを評価し直すことで、自分の人生を肯定的に受け入れることだと言える。しかし、成熟期に完全性を獲得できない・欠如したままでいると、自分の人生に後悔や挫折感を持ち、自分の人生を受け入れられない。そして、完全性を獲得す

るために別のことを始めようとしても、残りの人生は限られているため時間が足りず、絶望感に陥る。これが、成熟期の危機である。(エリクソン 1958=1987)。

## 2.2 エリクソンの発達理論を使った先行研究

エリクソンの発達理論については多くの研究がなされてきたが、本論では、野口 (2013) による、エリクソンの発達理論を用い、親の離婚を経験した子どもの心の発達についての調査を取り扱う。

野口は、子どもの精神発達において、親の離婚はプラス面とマイナス面の両方があると報告している。プラスに影響を与えるのは、離婚するまでの親同士の不仲が深刻だった場合である。子どもは、離婚によって両親の不和から解放され、自立心が向上する。したがって、周りからはしっかりした子どもに見えることがある。しかし、別れた親と面会できないことや、経済的な苦しさ直面する機会が多く、子どもは親への甘えや怒りなどの気持ちを抑え、現状に適応しようとするマイナス面もある。また、親の離婚によって転居や転校せざるを得なくなった子どもは、安心感のあった家や地域、友人を失うというマイナス面がある。これは「子どもなりに築いてきた精神的資産の喪失とも呼べるものであり、自己の価値を問い直すような重大な出来事」(野口 2013:9) である。そして、親の離婚理由が曖昧なままであり、子ども自身も親の離婚を理解できない場合、対象喪失りが生まれやすい。親との別れが死別であるならば、残された親子で悲しみを共有し支え合えるが、離別であれば、残された親子で悲しみを共有したり、気持ちを支え合ったりすることは厳しくなる。A は両親が離婚した当時、離婚の事実を知らされていなかったため、このケースに該当する。

また、養育費に関しても野口は言及しており、養育費は進学など子どもの社会的自立を助けるだけでなく、「自分は親から見捨てられていない」という別れた親との絆を生む効果があるとも述べている。

野口の調査では、思春期に親の離婚を経験した子どもは、非離婚の子どもや思春期を過ぎてから離婚した子どもに比べて、抑うつ傾向が高いことが示された。また、親の離婚を経験した大学生は、ポジティブな自己評価ができないときに「親の離婚が原因」だと捉える傾向があることも示されている。その理由として、思春期を迎える頃の子どものにとって離婚とは、反抗できる親を失ったり、残された親に遠慮して反抗ができなくなったりする出来事で、親との葛藤を抑圧してしまった結果、抑うつのような感情として自身の中に抱え込んでしまうのではないかと野口は述べている。

また、野口 (2009) は、親の離婚を経験した青年期・成人期の人々の精神発達をたどり、エリクソンの指摘する初期成人期の発達課題「他者との親密性」についても研究している。野口は、親の離婚を経験した子どもは親密になること(結婚する・他者との距離を縮める・異性と親密になる等)に対して恐れや抵抗感が生まれると報告している。乳幼児期から思春期において親との安定した人間関係は、子どもの自己肯定感や自己存在感、自尊心の形成には非常に重要である。一方で、親の離婚経験のある子どもは、両親の離婚によって人間関係に対して恐怖感をもち、それを自分でも自覚しないような心の奥に閉まってしまう傾向があると野口は結論づけている。

これらの研究から、確かに個人差はあれども、子どもの精神発達や発達課題の達成において、親の離婚は大きく影響を与えることが読み取れる。しかし、親の離婚によって生ま

れる困難や発達の危機に打ち勝てるような出来事や重要な他者の存在があれば、親の離婚による影響はなるだけ最小限に抑えられるのではないかと筆者は考えている。

### 2.3 ハイイツ・コフートの自己愛理論

次に、本論でもう一つ核となる自己愛の理論について説明したい。

#### (1) 自己愛という言葉の由来と意味

自己愛という言葉の始まりは、ナルキッソスが池に移る自分の姿に恋をしてしまい、自分の姿に見とれているうちに死んでしまうというギリシャ神話に由来している。narcissismの日本語訳したものが自己愛であり、自分自身を愛することや、大切に思うことを意味している。小此木啓吾（1992）は、自己愛とは、自分や他人の心の中に、何とかして自分の気に入るような鏡像を作り上げ、それを見て安心したり、満足したりしたい気持ちが働くことだと報告している。

#### (2) 自己愛に対する現状と捉え方

しかし、近年では自己愛が肥大化しているとも小此木は指摘する。自分の自己愛を守るために、平気で他人を傷つけたり利用するような行動が見られたり、自己愛が傷つく場面や環境を避け、学校や社会からひきこもるような現象もあると中村晃（2004）も述べている。また、大石史博ら（1987）は、自己愛的傾向の程度によって、欲求不満の場合にどのような反応をするかを検証した結果、自己愛の傾向が強い人は、欲求不満の原因を自分ではなく他人や環境と捉え、自己を偽り、妥協することが少ないと論じている。上地雄一郎・宮下一博（2004）は、このような青年たちが引き起こすさまざまな問題の背後には、自己の存在を認めてもらおうとする必死のあがきや自己の価値を認めてもらえないための傷つきが隠れており、彼らの問題を理解する際には自己愛という概念が有効になると述べている。しかしながら、小此木は自己愛とは誰にでもある心理とも考えている。つまり、自己愛にはネガティブな影響だけでなく、ポジティブで健康的な影響もあるはずだと考えられる。中村（2004）も、自己愛は現代社会において、自分自身を大切に思うことや、成長や成功をおさめようという適応的な行動を生み出す場合と、自己中心的な行動やひきこもり、内面の空虚感や自己憎悪などを引き起こす不適応的な場合の両方を含んでいると述べている。

近年の自己愛の研究で重視されているのはカーンバーグとコフートである。しかし、カーンバーグの理論では、誇大的・自己顕示的な自己愛タイプが重視され、正常な自己愛と病的な自己愛の違いが明確に区別されている。そのため、軽症の自己愛である「周囲の反応を過剰に気にする」過敏型について考える場合には、健康的なものから病的なものまで自己愛は連続したものであると捉えているコフートの理論のほうが適している。したがって、本論では、「自己愛を発達的な動因としてとらえ、健康的な自己愛の発達が自己の発達に貢献する」（P・H・オーンスタイン 1991）と考えたコフートの自己愛理論に触れたい。

#### (3) コフートの自己愛理論の概要

自己愛理論については、フロイトの「自体愛から自己愛を経て対象愛に至る」という理論が基本だったが、コフートは「自体愛から自己愛を経て、自己愛のより高度なかたちへの変形へと至る」と考えた。コフートによれば、自己愛は2つの要素から発達をする。1つ

は「誇大自己」という、親に自慢や誇りを受け入れてもらいたいという自己顕示性のことである。この誇大自己を満たすことで、自己の安定性と凝集性を高め、主張性へと発達させる。もう1つは「理想化された親イマージ」という、親を完全で万能だと思い、自分も親のようになりたいと思うことである。この願望によって子どもは自己の凝集性を高め、他者に対する敬意へと発達していく。そして、発達したことで生まれた主張性は「健全な自己主張と野心」、他者に対する敬意から「理想と目的」へと変化していくことで、健康的な自己愛を達成していくとコフートは考えた（佐方哲彦 1986）。

コフートによると、自己愛パーソナリティ障害とは、幼児期に自己愛的な欲求に対して適切な対応を受けられず、幼兒的なままの自己愛レベルにとどまったことによって発達が停止した状態である。本来であれば、誇大自己と親への理想化という自己愛的な欲求が十分体験されることで発達するはずだった自己愛の向上に欠損が生じるために発生するものである（上地・宮下 2004）。

#### （4） 健康的な自己愛を育むために必要なこと

また、コフートは、健康的な自己愛を発達させるためには、手で触れる、抱っこする、話しかける等といった母性的応答が重要だと述べている。自己と対象の区別がついていない状況（自己一対象）の乳児にとって、幼兒の存在全体に対して母性的応答を受けることで、不安や怒り、欲求を回避し、パニック状態に陥らずにいられる。そして、何でも思い通りにできる自分と、思い通りにしてくれる母親を結びつけることで、安定した自己一対象を確立できる。コフートは、この自己一対象は最も基礎となる自己愛であり、これが誇大自己と親イマージの2つの要素に分かれると述べている。つまり、母性的応答を十分に受けられなければ、誇大自己や親イマージは生まれず、その後発達するであろう健康的な自己愛を獲得できないのである（P・H・オーンスタイン 1991）。そして、自己愛的な欲求に応じてくれる重要な他者を自己対象（self-object）と呼び、人々はそれぞれの発達段階に合わせて、重要な他者を一生求め続けるとコフート（1984=1995）は述べている。

コフートによると、青年期には身体的変化や自意識の高まりによって自己愛的な特徴がみられる時期であり、青年期には自己の再構築が重要な課題となる。この時期には、自分の姿は他者の目にどう映っているのか、他者が自分のことをどう思っているのかを非常に気にするようになる。青年期の少年少女にとって重要な他者とは、周囲の友人や仲間、そして恋人がその担い手であると指摘されている（上地・宮下 2004）。したがって、青年期には親の影響力が低下しており、友人や仲間・恋人などの重要な他者を見つけることが重要だと筆者は考える。

#### 2.4 コフートの発達理論を用いた先行研究

エリクソンの発達理論と同様に、コフートの自己愛理論についても、多くの研究がなされてきた。小塩真司（2000）は、自己愛傾向と一般的な異性に対する態度との関連を検討し、全体的に自己愛傾向の高い者ほど、異性に対して積極的な態度を示す一方で、異性からの評価を気にする傾向があることを報告している。また、Campbell, W. K. (1999) は、異性友人との関連においては、自己愛傾向の強い者は、異性との親密さに欠ける傾向があり、異性と関係を持つことで自分の自尊心を高めていること、また、完璧な異性に魅力を感じることを報告している。これらの調査結果からは、青年期における重要な他者として

機能するはずの友人との間に、親密で信頼できる深い関係を持っていない青年は、自己愛において何らかの問題を抱えている（張 2014）。

また、宮下（1991）は、青年の自己愛傾向と両親の養育態度、家庭の雰囲気との関連について調査した結果、母親に関しては、女子の場合には温かい受容的態度をとることで子どもの自己愛傾向を抑制し、感情的・情緒不安定などの否定的な養育態度をとると子どもの自己愛傾向が高まるとを報告している。一方、父親に関しては、男子の場合では支配・介入的であると子どもが認知するほど、子どもの自己愛傾向が高いことを報告している。さらに、小西瑞穂（2009）は、青年の自己愛傾向と両親の養育態度との関連を検討し、父親の愛情、甘やかしとされる養育態度をとればとるほど、女子の自己愛傾向は高まるという関係を報告している。

張愛子（2014）は、青年期の自己愛傾向（誇大性、評価過敏性）と重要な他者（同性・異性の友人）との親密な関係について、また、青年期において継続して重要な他者として影響を与える親の養育態度と自己愛傾向の関連について調査を行った。

その結果、友人関係において、女子の自己愛傾向の「誇大性」に関しては、同性の友人関係の不安・懸念があるほど高くなり、異性の友人関係の信頼・安定が低ければ、誇大性を抑制すること報告している。また、男女ともに自己愛傾向の「評価過敏性」に関しては、同世代の同性・異性の友人に対して友人関係に対する不安や懸念が高ければ高いほど、過敏な自己愛傾向が高くなっており、同世代の友人に対する不安や懸念が低いことが「評価過敏性」の抑制につながると報告している。これは、青年期に重要な他者となる同世代の同性・異性の友人を見つけることは青年の自己愛の形成において重要であり、同世代の友人との親密な関係が自己愛の発達に重要役割を果たすと張は考えている。安達喜美子（1994）によると、青年にとって重要な他者の持つ意味を調査した結果、親は主に社会的知識・機能の習得、態度・価値の形成、信念・理念の形成にかかわる側面、友人は性役割、自己の安定や親密さの形成にかかわる側面において最も重要な存在であると述べている。また、親の養育態度において、自己愛傾向の「誇大性」に関しては、父親の尊重が強ければ強いほど、女子の誇大な自己愛傾向が高まると報告されている（張 2014）。

本章で報告した先行研究からは、次のことが明らかにされている。第一に、離婚が子どもの発達に影響を与えるということである。第二に、健全な自己愛の発達のためには、各発達段階での重要な他者を見つけ、より深い信頼関係を築くことの重要性である。しかし、両親が離婚経験を持つ子どもの誕生から現在までを追い、子どもの精神発達の調査を試みた研究はほとんど行われてこなかった。したがって本論では、離婚経験のある子どもが、各発達段階においてどのような過程を経て、自己愛を発達させるのかについて調査したい。

### 3 研究方法

#### 3.1 調査対象者

両親の離婚経験のある大学生 A に調査を行った。A は、22 歳の女性である。

#### 3.2 実施時期

2016 年 8 月～10 月の 3 か月間にわたって、A にログ作成をお願いした。11 月は、次々項以降で述べているような分析を行い、考察した。

### 3.3 調査内容とデータの情報収集方法

まず、データ収集のために、大学生 A が生まれたときから現在までのあらゆるエピソードをログとしてエクセルファイルに文字起こししてもらった。様々なエピソードに対して、A はどのように捉え、自己愛の形成に影響を与えたかを垣間見ることができる。しかし、本人の記憶のみに基づいたデータ収集では、特に生まれた頃や幼少期などの小さい頃のエピソードは記憶が曖昧で、データの正確性にも影響を与えてしまうことや、エピソード数が少ないことが考えられる。したがって、本人の記憶だけではなく、A の家族（母、祖母、叔母、祖父）から A にまつわるエピソードを聞いたり、A が小学 3 年生から 6 年生までの担任から学校での A の様子や、A が教師に打ち明けていた悩みや会話について聞いたりした。また、過去に書いた作文や絵、写真、小学校の通知表等からもエピソードを収集することにした。

A が残していた作文は数少なかったが、小学 1 年生の頃書いていた 1 年分の作文や、小学校・中学校の卒業作文からデータを集めた。A は小さい頃に絵を習っていたため、10 冊以上のスケッチブックが残されていた。この絵からは、A がどのようなものを好んでいたかを調べた。

写真については、A の幼少期である 1990 年代・2000 年代は写真を現像しているものが多く、アルバム 12 冊とアルバムに入らなかった写真多数が残されていた。なお、A の叔父の元妻が A のためにアルバムを購入し、写真を現像して装飾までしていた。しかし、小学 6 年生以降は携帯電話で写真を撮っていたり、家族から写真を撮られたりする機会が少なくなっていたため、現像されている写真はほとんどなかった。そのため、今まで A が持っていた携帯電話や、中学時代に A の友人と共同で管理していたホームページから写真や日記を集めた。

小学校の通知表は、小学 3・5・6 年生のものが残っていた。通知表の内容については、出席日数等の情報や、国語・算数・理科・社会・総合・図工・音楽・保健体育・技術家庭の各評価項目に対してよくできる (◎)・できる (○)・もう少し (△) と各教科についての五段階評価、生活態度に対してできる (○)、もう少し (△) の評価、担任からのコメントが書かれていた。

本論では、エクセルファイルに文字起こししたログデータを元データとして扱っている。ログには 164 の記述があり、それらから自己愛形成の過程を分析していく。

### 3.4 キーワードのタグ付け

前節で述べた情報収集や A 本人の記憶をもとに、ログとしてエクセルファイルにまとめた。そして、ログで繰り返されているキーワードを抜き出し、タグ付けた。その結果、1,657 個のキーワードがタグ付けされた。タグ付けの方法について、ある時期のエピソードを例にとって簡単に説明したい。『祖母が毎晩私を背負って、近所の川沿いを散歩して、子守歌を歌って寝かせていた。』というように、重要だと思われる下線部で示された単語を抜き出すという方法で取り組んだ。『背負って』『散歩して』『歌って』のような動詞の終止形になっていない単語は、『背負う』『散歩する』『歌う』など言い切りの形に変更して抜き出すようにした。また『祖母』『歌う』などの単語は他のエピソードにも重要なキーワードとして使われており、それらのタグが元データ全体で何回使用されているかをカウントした。全てのタグの繰り返し回数を手作業でカウントするにはあまりにも時間がかかり、間違い

が生じる可能性もある。そのため、筆者の習い事であるパソコン教室で、プログラミング言語の1つである Visual Basic for Applications (VBA) を教わり、繰り返し回数をカウントした。

### 3.5 タグのカテゴリ化

日記から取り出したタグの数は非常に多く、より有力な結果を得るために、類似しているタグを1つにまとめるカテゴリ化の作業を行った。カテゴリ化の作業により、カテゴリ数を160個にまとめた。カテゴリ化された単語の繰り返し回数についても、タグの繰り返し回数を合計したものを入力した。そして、繰り返し回数の多い順にカテゴリを並べた。この作業も、VBAを使って行った。また、有力な分析を行うために、繰り返し回数が3回以下のカテゴリはクロス分析・コレスポネンス分析に含めないことにした。これにより、最終的に分析で使ったカテゴリ数は122個となった。

### 3.6 分析手法

本論での分析は、カテゴリ化したカテゴリの繰り返し回数を記録したデータを用いて、SPSSでクロス分析とコレスポネンス分析を行った。また、本論ではカテゴリの単語の意味だけではなく、そのカテゴリがいつ出現しているのかも重要な意味を示す。そのため、カテゴリが出現した年齢についても、クロス分析とコレスポネンス分析を行った。コレスポネンス分析とは、集計したクロス集計結果を使って、行の要素と列の要素を利用し、それらの相関関係が最大になるように数量化して、その行の要素と列の要素を散布図に表したものである。その結果、年齢とカテゴリの出現回数の相関関係を表す散布図を得ることができた。

## 4 分析結果と考察

### 4.1 分析結果

以下図1~3は、クロス分析とコレスポネンス分析によって得られた分析結果を散布図に表したものである。

図1では、各発達段階において、Aのログはグラフのどの方面に位置したかを発達段階別に大きくまとめている。学齢期と青年期については期間が長く、同じ発達段階においても学年によって結果に差異がみられたため、それぞれの発達段階からさらに前半・後半と分けてまとめている。前半である学齢期1は小学校1年生から小学校4年生まで、後半の学齢期2は小学校5・6年生を表している。青年期1は中学1年生から中学3年生まで、青年期2は高校1年生から高校3年生までを示している。図2では、多数のカテゴリの中から、分析においてより重要なものを選別したり、複数のカテゴリにタイトルをつけたりしながら、さらに分類を行っている。図の横軸が1次元、縦軸が2次元である。1次元では、ポジティブなカテゴリ（横軸の値はマイナス）とネガティブなカテゴリ（横軸の値はプラス）におおよそ分かれている。2次元においては、大人との関係カテゴリ（縦軸の値はプラス）、仲間との関係カテゴリ（縦軸の値はマイナス）とコレスポネンス分析によって表された。なお、近い位置関係にあるタグは各エピソードの中で同時に使用されている単語を示している。図3は、図2で示されたカテゴリの散布図と図1の発達段階ごとに表れた変化図を





両親はまだ大学の授業が多かったので、叔母が通う奈良の大学に私を連れて大学で面倒を見ていた。

エリクソン（1958=1987）とコフト（1984=1995）によれば、他者や自分への信頼を獲得するためには、まず精神的・心理的欲求を母親から満たされることが重要であり、具体的には手で触れる・抱かれる・ほほ笑みかけられる・あやされる等の行為（母性的応答）が挙げられている。そして、母性的応答を十分に受けられなければ、誇大自己や親イマージは生まれず、その後発達する健康的な自己愛を獲得できないと述べられている。

A の家族へのインタビューの中で、A の母親の年齢はまだ若く、A が生まれた頃から中学生頃までにはあまり母性がなかったと母親自身が答えている。したがって、A は母親から十分にこれらの行為を受けていない。しかし、祖母や叔母が母親代わりとなって、A を背負ったり、歌ったり、面倒を見ていたことでA の精神的・心理的欲求は満たされ、課題を達成できたと考えられる。

以上のことから、課題を達成し、自己愛を育むことについて、必ずしも母親という血縁関係を持つ人物が存在していることが重要というわけではなく、誰かが子どもの発達にとって必要な役割を果たすことが重要であると言える。

#### 4.3 早期児童期における分析結果と考察

早期児童期（1～2歳）に挙げられる特徴は、2点挙げられる。第一に、2次元において乳児期と同じく大人との関係方面のカテゴリが多いこと、第二に、1次元において、ポジティブ方面に位置するカテゴリが多いことである。第一の特徴が表れた理由としては、A はまだ幼稚園などの同世代の多いコミュニティには所属しておらず、家族など大人の多いコミュニティに属していたことが挙げられる。以下の文章は、A が2歳の頃のログを引用したものであり、家族へのインタビューや当時のスケッチブックによって知った情報である。

絵の教室に通う。母と祖母が先生にお願いしたとき初めは断られたが私に絵を教えてほしいと頼み続けてくれた。その絵画教室で初めての子どもの生徒が私になった。

図2からも読み取れるように、習い事や好きなことをしているときは1次元のマイナスの値は大きい。すなわち、ポジティブ方向を強く向いていると言える。

早期児童期の課題は自律性であるが、自律性を獲得する過程に起こりうる現象として挙げられる、どんなに反抗しても母との関係が壊れないかを確認する（エリクソン 1958=1987）にあたる明らかなログが存在していない。しかし、家で絵を描くことが好きだったAが、毎週祖母が絵画教室まで送り迎えをしていることや、知らない大人がたくさんいる絵画教室の中でAが自由に絵を描けたことは、Aの絵を描きたいという気持ちを、家族や絵の先生、教室に通う他の大人たちが応援している表れである。このような過程を経て、Aは慣れないコミュニティに溶け込み、自律性を育んだと考察する。

#### 4.4 遊戯期における分析結果と考察

以下の表2は、遊戯期におけるクロス表分析結果である。

表2 遊戯期におけるクロス表分析

いつ	1次元
3歳	0.686
3歳	-2.519
3歳	-1.562
3歳	1.051
3歳	-0.096
3歳	-0.298
3歳	-0.254
3歳	-0.711
3歳	-2.423
3歳	0.578
3歳	-1.676
3歳	0.001
4歳	-0.610
4歳	0.070
4歳	-0.483
4歳	-1.331
4歳	-0.142
5歳	-0.921
5歳	-1.025
5歳	-1.740
5歳	0.202

まず、表2が示していることについて説明したい。1列目は、各エピソードが起こった時期についてまとめている。2列目では、各エピソードの1次元における値を示している。第4章第1項で説明したように、1次元はマイナスの値が大きければ大きいほどポジティブ方向を向いており、プラスの値が大きければ大きいほどマイナス方向を向いている。遊戯期において1番大きな特徴として表2から読み取れることは、各発達段階において最もポジティブな時期であるということである。なぜなら、遊戯期全21エピソードの中で、ネガティブ方面を示している割合が6エピソードだからである。すなわち、エピソードの2/3以上がポジティブ方面を向いているということである。2/3以上ポジティブ方向を向いているような発達段階は遊戯期にのみ確認することができた。また、1次元で-2以上の値を示すカテゴリ出現回数が全発達段階の中で2回と最も大きいことが示された。

遊戯期多く見られたカテゴリは、好きなもの／習い事／おしゃれ憧れ／褒められるという4つである。これらのカテゴリの中で褒められる以外の3つにおいては特に同時に使われることが多く、ポジティブ方向を大きく向いているカテゴリであることが図2から読み取れる。

以下3点の記述は、上で述べた4つのカテゴリが使用されているログである。

ディズニープリンセスに憧れていた。プリンセスの衣装は買ってもらえないので、シンデレラの汚れた格好で掃除をしているシーンでなりきっていた。(3歳)

幼稚園でヤマハ音楽教室に通う。音の聴き取りを1番に答えられたら家族がすごく嬉しそうにほめてくれた。だから音の聴き取りは誰よりも早く聴き取ろうと思っていた。(4歳)

大人っぽいおしゃれなものが大好きで、母や祖母のピンヒールをはいて外を歩き回り、ご近所さんに自慢していた。(4歳)

3点のログからも分かるように、遊戯期のAはディズニープリンセスという憧れの存在を見つけ、ディズニープリンセスになりたいと夢見たことを自由に表現している。また、Aの叔母が弾いていた憧れのピアノを習い始め、頑張ったことを家族が褒めてくれることを嬉しいと感じている。

また、エリクソン(1958=1987)が遊戯期の女子は自分を魅力的にすることで相手を引き付けようとする場合があると述べていると第2章で報告していた。3点目のログについては、4歳のAがピンヒールという大人の女性らしい物を身につけて、近隣の人々に見せに行く行為は、自分が魅力的に思われたいという気持ちの表れではないかと考察する。

しかし、遊戯期におけるコレスポネンス分析結果では筆者の考えとは異なる結果が表れた。それは、遊戯期においても乳児期や早期児童期と変わらず、2次元において仲間との関係よりも大人との関係を示すカテゴリのほうが多く繰り返されていたことである。筆者は、乳児期や早期児童期とは異なり、幼稚園という同世代の多いコミュニティに属するため、これまでよりも仲間との関係の方向を向くと考えていた。しかし、ログでは仲間を示す友人などのカテゴリよりも、親や家族、教師など、大人を示すカテゴリの繰り返し回数が多く存在していた。このことから、子どもが属しているコミュニティの種類よりも、どのような重要な他者から影響を受けたかが子どもの発達に影響を及ぼすことが分かった。

#### 4.5 学齢期における分析結果と考察

##### (1) 学齢期1における分析結果と考察（小学1年生～小学4年生）

本章第1節で述べているように、学齢期は小学1年生から小学6年生までと非常に長く、6年間で分析結果も異なっているため、学齢期を1と2に分けて報告しようと思う。まず、小学1年生から小学4年生までにあたる学齢期1についての分析結果と考察を行う。

学齢期の発達課題は生産性であるが、この課題は小学4年生時点では達成していないと筆者は考察する。なぜなら、小学4年生時点では、コレスポネンス分析結果やAの行為から、生産性よりもむしろ学齢期の危機である劣等性が読み取れるからである。図2から分かるように、遊戯期とは異なりネガティブ方面を向いているログの割合が大きく増えた。このことは以下の表3からも読み取れる。

表3 学齢期におけるクロス表分析

いつ	1次元	いつ	1次元
小1	0.228	小2	0.683
小1	-0.374	小2	1.396
小1	-0.112	小2	0.557
小1	-0.067	小2	0.884
小1	-0.483	小3	-0.029
小1	-2.264	小3	-0.395
小1	-0.291	小3	0.882
小1	-2.873	小4	0.556
小1	-0.687	小4	0.770
小1	-1.651	小4	2.831
小1	1.029	小4	3.000
小1	-0.243	小4	0.755
小1	-0.192	小4	1.012
小2	-0.384	小4	-0.645
小2	0.133	小4	-1.765
小2	-1.008	小4	0.185
小2	1.317	小4	-1.089

小学1年生から4年生までの34エピソードのうち、ポジティブ方向を向いているのは18エピソードであった。また、小学2年生から4年生までではポジティブ方向を向いているものは21エピソードのうち7つであった。遊戯期では2/3がポジティブを示していたのに対し、小学2年生から4年生では1/3がポジティブ方面を示しているという結果から、Aの発達に大きく変化があったという証である。

学齢期の発達課題である生産性に最も影響を与え、劣等感を表した出来事は、両親の離婚である。両親が離婚したという事実は当時のAは知らされていなかったが、感じ取っていたとAは述べており、両親の離婚による出来事によってAの発達に影響を及ぼしている。

以下2点の記述は、コレスポンデンス分析で最も大きなネガティブ値を示したログである。

両親が離婚する。父が仕事で忙しいため別居していると聞いていた為、このことには気づかなかった。

母が単身赴任生活を始める。父とは別居生活のため、親とは土日しか会えない。

続いて、以下の記述は、両親の離婚後Aの母は単身赴任生活を始めており、家族との関係についてAが当時を振り返って記入したログである。

土日は母が塾の宿題を一緒にみってくれることになっていた。私がわからない問題にぶつかり、よく怒られた。「わかっているくせにわざとわからない振りをしている」とよく怒られたが、私は本当に分からなかった。本当に分からないといっても分からない振りをしているといわれ続けたことが辛かった。せっかく母と会える土日なのに喧嘩したくない。仲直りしたい。と思っていた。でも本当に問題がわからないことを理解してもらえない状況でどう母と仲直りしていいのか分からなかった。

日曜の夜は母が名古屋（転勤先）へ帰るので、寂しかった。我慢ができないときは母の足にしがみつき、泣いて抵抗していた。

こんなに大家族なのに、〇〇の名字（Aの名字）は私しかいない。家族のことは大好きだったが、いとこたちには名字の同じ家族がたくさんいてうらやましいと思っていた。

塾までの送り迎えは、タクシーだった（家にいる祖母は運転できない・学校の時間が遅くなるとバスでは塾に間に合わない為）。家族が車で送り迎えしてくれる友達がうらやましかった。タクシーで送り迎えしてもらっていることを知られたくなくて、わざと塾から遠い場所で下してもらったり、こっそりタクシーに入ることが多かった。

これらの小学4年生時の家族に関連するログでは、親の離婚をきっかけに、寂しい・周りをうらやむ気持ちが繰り返し使用されている。また、これらのログから劣等性が読み取れる言葉は、母の足にしがみつき、泣いて抵抗する行為である。また、母と塾の宿題を解

き、無事に宿題を終わらせることよりも、母と仲良くなることを第一に捉えていることもうかがえ、劣等性の表れだと筆者は考察する。エリクソン（1958=1987）は、劣等感とは知識より母親を必要とすること、家で赤ん坊のままにいたいことと特徴づけているが、Aのこれらの行動や思考はエリクソンの定義する劣等感に非常に類似していると考えられる。したがって、学齢期1では、発達課題である生産性よりも、危機である劣等感が表れていると筆者は考察する。

## (2) 学齢期2における分析結果と考察（小学5年生～小学6年生）

図1～3より、学齢期2について3点のことが読み取れる。第一に、1次元において全体的にポジティブ方向に移動していることである。全体的にポジティブ方向を向いた理由として当時の担任の存在が大きく影響している。学齢期1では、見捨てられる／親の関係悪化などマイナス方向を向いているカテゴリが繰り返し使われていたが、学齢期2では担任に関連したログ数は20のうち9つ存在している。また、担任に該当する教師と同時に使われているカテゴリは、コレスポネンス分析より宿題／評価／悩む／喜ぶ／勉強であると読み取れる。悩むというマイナス方向を想定させるカテゴリも存在しているが、喜ぶというカテゴリが近くにあることから、学齢期1と比べてプラス方向に近づいていると言える。

第二に、小学6年生で大人との関係方向で大きな値を示していることである。大人との関係方向で最も大きな値を示しているのは評価というカテゴリであり、小学校高学5・6年では特にこのカテゴリを繰り返し使用していた。その理由として、当時のAは中学受験を迎えており、中学受験に対する評価、すなわち塾での成績と合否を重要視していたことが考えられる。そして、学校も担任を中心とした周りから認めてもらいたいAは、学校の宿題や授業・生活態度の評価を重視していた。

第三に、乳児期から学齢期1までの2次元はほとんどが大人との関係方向を向いていたが、仲間との関係方向かつネガティブ方向のログが表れていることである。該当する記述が以下のものである。

恋愛相談をきっかけに、ギャルのグループと仲良くなる。同じグループではなかったが、毎日手紙交換していた。（内容は、脈アリだから頑張るといったものが8割・他のギャルの友達の愚痴相談等）

このログには、友達や手紙交換、所属するグループについてなど、大人との関係では使いつらいと思われるキーワードが多い。また、次節で述べる青年期に多いカテゴリの集まりと類似した場所に位置していることから、青年期への前段階となるエピソードだったのではないかと筆者は考察する。

学齢期1では発達課題の生産性を獲得していないと考察したが、学齢期2では獲得できたと考察する。その理由として2点挙げられる。第一に、上記で報告したような青年期への前段階となるログが存在していることから、青年期の課題達成に向けて移行していると言えるためである。第二に、エリクソン（1958=1987）の定義する生産性（自分が誰かの役に立っている、ものを作り、よくできる・完全にできると感じ、仕事を完成させる喜びを感じる）に該当するログが存在していることである。以下の記述は、Aは生産性を獲得したと筆者が捉えているログである。

私の授業ノートを先生が研究発表に使ってくれたと知ったとき、すごく嬉しかった。

このログについて A に確認したところ、先生が自分を評価してくれている証拠だと感じ嬉しく思っただけでなく、自分の尊敬する先生の研究発表に役立てたことも嬉しかったと話していた。したがって、このログはエリクソン（1958=1987）の定義する生産性に当てはまるものと考えられる。また、中学受験に合格したことで、努力すれば自分は課題を達成できるという自信が付き、完成させる喜びを感じていることから、生産性を獲得できたと筆者は考察する。

### (3) 学齢期 1・2 を総括した考察

学齢期 1・2 の分析と考察から、2 点のことが学齢期全体として考察できる。第一に、親の離婚は子どもの発達に大きく影響するという一般論が A においても証明されたということである。本論でも、親の離婚が子どもの発達に及ぼす影響について調査を行った先行研究と同じ結果が表れた。

第二に、親の離婚に関連するエピソードにより発達課題の危機に陥ったとしても、重要な他者がいれば危機状況から課題達成に状況を好転させられる場合があるということである。第二章で述べたように、野口（2013）の調査結果によると、親の離婚理由があいまい・子ども自身も親の離婚を理解できない場合、対象喪失が生まれやすいこと、残された親子で悲しみを共有したり、気持ちを支えあったりすることは厳しくなることが報告されている。確かに、A は母と離婚の悲しみを共有したり、気持ちを支えあったりすることはできなかった。しかし、その分担任が親の離婚による寂しさを共有し支えてくれたと A 自身は感じている。したがって、担任と A の関係性によって、劣等感の危機を軽減することができたのではないかと筆者は考察する。この考察は、1 人の誕生から現在までを追って調査したからこそ得られたものであり、本論の仮説を明らかにする上で重要だと筆者は考えている。

## 4.6 青年期における分析結果と考察

### (1) 青年期 1 における分析結果と考察（中学 1 年生～中学 3 年生）

コーレスポネンス分析の図 1～3 より読み取れる青年期 1 の特徴が 2 点挙げられる。第一に、1 次元においてネガティブ方向を向いているログが多いことである。青年期 1 のログが集合している位置には、孤独／いい関係を築けない／友達／恋愛イベントのカテゴリが存在している。第二に、2 次元において仲間との関係方向を向いていることである。その理由として、A は中学時代には塾には通っておらず、学校の教師や家族よりも友人・部活にまつわるエピソードが多いことがあげられる。

青年期の発達課題である同一性を青年期 1 の時点で獲得できたかどうかを考察するために、いくつかのログを確認したい。以下のログは、この 2 点の特徴を示す青年期 1 時代のログである。

1 人で下校するのが嫌だった。1 人でいる姿を周りで見られたら、友達がいないと思われるのではないかと考えていたから。

軽音の関西大会の出場メンバーを決めるオーディションに落ちる。私は、大して努力していなかったが、他のバンドメンバーが上手かったので、自分も上手い・評価されていると勘違いしていた。でも、顧問が私ではなく中2から入ってきた他の部員を可愛がっていたことから本当はなんとなく察していたが、それでも自分は上手いと思い込ませていた。案の定私より努力したその部員が合格した。そのときに、自分の現実を知って、すごく悔しい気持ちになった。でも、落ちた直後は反省よりも、なんでトップバンドに所属している私が選ばれないのかという悔しさだったと思う。

中学の終わり頃、今出川校地での思い出文集を書かなければいけなかった。正直、1番に思い浮かぶのは、大会のオーディションに落ちて悔しい思いをしたことだった。でも、そんな私の思いは友達や同級生に知られなくなかったので、当たり障りなく学祭時代の青春を作文にした。同じバンドメンバーで大会オーディションに落ちた友達は、オーディションに落ちた悔しさを正直に書いていた。そして、大会を終えて、12月の決勝の大会に向けて自分は全力で応援すると書いていた。私は素直に自分の気持ちを公の場で伝えられる友達のことをすごいと思ったし、素敵だと思った。私は自分がひねくれていることを再認識した。

バレンタインデーのときに、友達がその人にチョコを代わりに渡してくれた。中学入学以来、初めて男子と必要な用事以外でメールを送り合うようになった。

これらのログから3点のことが分かる。第一に、孤独な自分を見られたくないということである。1つ目のログでは、周りから「Aは独りぼっち」と思われることを恐れている。これは、周りからどう見られるかを過剰に気にするという、まさに青年期での行動であり、コフトが述べる軽症の過敏型自己愛に該当している。第二に、Aがこれまでの人生で最も大きな挫折を味わい、現実をみたことである。Aは、中学1年生の夏頃から軽音楽部に所属していた。Aにとっての最大の挫折とは、軽音楽部の関西大会に出場する部内選抜メンバーを決めるオーディションに落ちたことである。学齢期2までには親の離婚など不運な出来事は見られたが、受験に無事合格したり、周りがよく褒めてくれたりなど、あまり大きな挫折を味わったと思われるログが存在していない。そして、味わった挫折を受け入れられず、4つめのログでは心を開いてありのままの自分を文集に書かないという行動につながっている。挫折に対して自己責任であることを認められないという思考は、第2章で扱った大石らの研究結果と同じものである。この思考から、青年期1のAは自己愛的傾向が強かったと考えられる。第三に、異性には近づけなかったことである。異性が苦手で、異性と話すことが怖かったとAは話している。

したがって、2点のことが考察できる。第一に、青年期の課題である同一性を青年期1の期間では獲得できていないということである。エリクソン(1958=1987)は同一性について、自分はありのままの自分であり続けられると思えること、社会に役目を果たし、社会から認められている自信をもつと述べている。しかし、1人でのいる姿を周りから見られたくないと思う思考や、挫折によって心を開いてありのままの自分を伝えない行動、異性に認められていない自分という現実をみるのが怖く近づけない行動は、エリクソンの言う同一性とはかけ離れた心理状況だと考察する。また、学齢期1ほどの危機には陥っていないが、軽音

楽部での挫折を味わってからの卒業文集で、毎日が楽しいと偽りの自分を演じるという行為は、青年期1の危機である同一性拡散への前兆だったのではないかと考察する。第二に、中学時代のAは比較的自己愛傾向が高かったということである。しかし、軽症の過敏型自己愛に該当していることや、自己愛によって他者と社会生活を送れない状況までには至っていなかったことから、青年期には少なからず誰でも抱く範囲の自己愛感情であると筆者は考察する。

## (2) 青年期2における分析結果と考察（高校1年生～高校3年生）

コレスポネンス分析結果図1～3より、読み取れる青年期2の特徴は2点ある。第一に、2次元において青年期1とは異なり、仲間との関係の方向にも大人との方向にも両方を向くログが存在していることである。その理由として、高校1年生から塾に通い始めたこと、大学進学について母や塾の先生に相談したり、母と揉めたりなど、青年期1に比べて大人との関わりがAにとって重要だったためと考えられる。

第二に、1次元において学年があがるごとに全体としてポジティブ方向に移動していることである。青年期2では軽音楽部についてのログが多いが、軽音付近に位置するカテゴリには、褒められる・認められる／楽しい／練習／頑張る／嬉しいといったポジティブな言葉が多く存在している。以下の記述は、これらのカテゴリを含んだログである。

軽音の大会の出場メンバー決めがあった。私はもちろん立候補したが、ほかのベース担当の立候補者がいなかったため自動的に私がメンバーに選ばれた。しかし、高3でメンバーに選ばれるために高1からは自分に甘んじることなく、基礎練習をし続けて上達した自信があった。だから、ほかのメンバーの立候補がなくてラッキーとはあまり思わず、選抜メンバーとして自信をもって部活に関わることができた。

私以外の高3メンバーは過去にも大会参加歴があったが、私だけが最初で最後の大会だった。だから、選抜メンバーの誰よりもやる気があったし、誰よりも練習した自信がある。メンバーに選ばれてからも、自分自身で上達したことが分かり、周り（先輩・同期・後輩）にも変わったと評価されるようになり、練習すること・努力することが楽しいと感じていた。

大会から約2か月後に、私たちの学校の点数の詳細が郵送されてきた。ドラム・ベースへの演奏評価は全出場校150校中7位だった。総合点は入賞で悔しい思いをしたが、私の楽器の点数が高かったことで、中学時代のバンド内における自分のみじめさや劣等感・高校3年間続けた地味な基礎練習の辛さすべてが吹き飛んだ。大会側から客観的に評価されたことは私の自信につながったし、努力すればその分報われることが分かった。

以上の軽音楽部関係のログより、同一性の確立において部活内での重要な他者（先輩・同期・後輩・コーチ）が大きく影響を与えたと考えられる。3つのログからはA自身の3つの思考や変化が見られる。まず、努力すれば報われるという考えである。次に、ベース奏者という自分だけの役割に一生懸命取り組み、チームとして良い成果を出そうとする考

えである（バンド内での A はベースを担当している）。最後に、中学時代には練習を怠っていたが、高校時代では練習を頑張ることが楽しいという考えに変化していることである。軽音楽部での経験は、人をいつまでもうらやましがったり、楽しいふりをする偽りの自分を演じたりせず、ありのままの自分で過ごすことへの恐れが消えている。そして、部活内での重要な他者に認められている自信を持つことにつながっている。青年期 1 では、軽音楽部や異性に認められていないと認識していた A だが、青年期 2 では、A にとって最も重要視していた軽音楽部というコミュニティの中で認められ、同一性を獲得できたと筆者は考察する。また、軽音楽部での A の体験は、コフート（1984=1995）が自己愛を育むうえで必要とする青年期の自己の再構築に該当すると考察している。中学時代に大きな挫折を味わい、劣等感を持った状況の中、A 自身の努力によって部活仲間という重要な他者の存在を再認識し、仲間から認められることで自己の再構築を行い、健康的な自己愛を育んでいると考えられる。

しかし、親権を持つ親（A の場合は母）に恋人ができたときの子どもの反応について、青年期 2 の A には見られており、確認しておく必要がある。次の記述が、その反応を示しているログである。

何度か怪しい時期があったが、母に確実に彼氏の存在いることが分かったのが高 3 のときだった。母より少し年上で、お金持ちの男の人だった。高校生にもなると母が新しい男の人を見つけるということは仕方なく感じる一方、その人だけは許せなかった。私の塾の送り迎えに母ではなくその人が来ること・母と一緒に迎えに来たかと思えば、母と今晚 2 人で過ごすから先に家に帰れと言われたこと・母の店にその人が居候していることが許せなかった。40・50 代なんだから、節度をわきまえてルールを守ってお付き合いをしてほしいと思っていた。しかし、母が選んだ人に私が口出しするのも違うと思い、母には言わなかった。

私の卒業式に、母とその男の人（母の恋人）がついてきた。式の最中は母のみの出席だったが、その男の人を見た友達たちは、「お父さんは式には参加しないの？」と聞いてきた。その場では言葉を濁してごまかしたが、学校に来てほしくなかったのに…と思っていた。私は男の人のこれまでの態度も好きではなかったが、私にしか関係がないので黙っていたが、友達にその男の人を「お父さん」と認識されたことが私にとっては本当に嫌だった。

父と 1 時間だけだったが再会した。父から今は新しい奥さんがいると言われたが、あまりショックを受けなかった自分に驚いた。大人になったような気がした。

3 つ目のログからは、両親の離婚自体については受け入れており、前向きにとらえている様子がうかがえる。父の再婚を知っても傷つかない理由としては、父との関わりはほとんどなく、親として父を見ることがあまりなかったからだと考えられる。しかし、母については、1 つ目・2 つ目のログより恋人ができることは受け入れられず、許せないという思いも表れている。A の母の恋人のことが苦手だったことが子どもの A にとってさらに許せない気持ちを大きくさせたとも思われるが、これまで親として認識していた母が女性として

家庭から離れていくことに A は強い嫌悪感を抱いていたと考えられる。したがって、青年期 2 では同一性は獲得するも、女性として生きようとする母を許せるまでの発達段階には至っていないことが読み取れる。

#### 4.7 初期成人期における分析結果と考察

図 1～3 のコレスポンデンス分析により初期成人期に見られた特徴として 2 点挙げられる。第一に、1 次元については青年期 2 と比べるとネガティブ方向を向くログが増えていたが、初期成人期全体としてはポジティブ方向を向いている。第二に、2 次元についてはほとんどのログで繰り返し使用されているカテゴリは仲間との関係方向を向いていることである。

初期成人期で繰り返し使用されているカテゴリは、ボランティア／サークルで出会った人／積極的／仲良くなる／近づきたい／親切にされる／外国／楽しいなどが近い位置関係にあり、1 つのログで同時に使用されていたカテゴリであると言える。このことから、A はサークル内外・国内外でのボランティア活動を通して、青年期 2 以前には出会えなかったような多様な人と出会い、その人たちと仲良くなりたいたい・自分の視野を広げたいという思考が読み取れる。

第 2 章で報告しているように、エリクソン（1958=1987）は、初期成人期の発達課題である親密性について、自分のことを愛してくれる友人やパートナーなど重要な他者を見つけ、魅力や愛情を注ぎ、注がれることで相互的な親密関係を築くことだと述べている。上記では、多様な人との出会いや仲良くなりたいたい思いについて述べているが、これは重要な他者との親密な相互関係ではない。初期成人期での A にとっての重要な他者は A の恋人であると筆者は考える。

親密性は現段階では完全には獲得できておらず、課題達成の途中にあると考察できる。その理由として 2 点挙げられる。第一に、図 3 より、恋愛の相手カテゴリの付近には、主張／泣く／悩むというカテゴリが位置している。これは、恋人に対してネガティブな感情を抱いているわけではなく、友人には言えないもしくは知られたくない感情や考えを伝えようとしている表れである。以下のログは、恋人から A の欠点を指摘されたという内容のものである。

彼氏に、私は自分が辛い気持ちになったとき・傷ついたときに他人事のような態度をとると怒られる。彼氏に言われて初めて自分の態度に気が付いた。実際に思い返すと、本音をさらけ出すのが怖いと思っている。他人事のように話していれば傷つかないで安定した自分でいられると思っている。でも、他人事になって思ってもいないことを話しているときには胸が苦しくなることが多い。お互いのためにも、本音で、気持ちを取繕わずにそのまま伝えてほしいと彼氏に言われると、隠していた本音を一気に話し始める。隠している本音を話すときには泣いていることが多い。他人事の態度をとることは自分の欠点だと自覚するようになり、現在はなるべく他人事にならないように努力している。今でも他人事の態度は時々とってしまうが、まずは他人事の態度をとっていることを自分で理解し、本心は何かを考えるようにしている。

これについて A は、恋人に本当の気持ちを伝えて嫌われたくないという心理で他人事の態度をとってしまうと発言している。しかし、他人事の態度をとり続け、それを叱る他者

がいなければ、他者と形式的な人間関係しか見いだせなくなるだろう。これは、初期成人期の危機にあたる孤独状況である。また、第2章で述べたように、野口は、親の離婚を経験した子どもは親密になることに対して恐れや抵抗感が生まれると報告している。Aの他人事の態度が離婚による影響であるとは断定できないが、図3より恋愛相手と母のカテゴリが非常に近い位置関係であることから、両親の離婚による影響の可能性も存在している。しかしながら、離婚による影響であると仮定したとしても、Aは現在他人事の態度を改善しようとしており、改善の余地もある。したがって、Aの恋人は、Aの初期成人期の発達において重要な他者であり、今後のAの言動によって発達課題の達成可否が変わると筆者は考察している。

## 5 おわりに

### 5.1 まとめと今後の課題

本論では、これまでに述べていたように、離婚経験のある子どもは、各発達段階においてどのような過程を経て、自己愛を発達させるのかという点について、エリクソンとコフートによる理論と先行研究に基づいて研究をすすめてきた。研究では、乳児期・早期児童期・遊戯期・学齢期1（小学校1年生から4年生）・学齢期2（小学5年生から6年生）青年期1（中学時代）・青年期2（高校時代）・初期成人期（初期成人期）の8つの発達段階に分け、それぞれの発達課題達成の過程について分析を行った。

この分析によって明らかにされたことは、以下のことである。それは、両親の離婚経験の有無に関わらず、各発達段階に合わせた重要な他者との密接な関わりがあれば、子どもの自己愛は育成され、発達課題を達成できるということである。第4章でも報告しているように、Aの乳児期には、母よりも祖母や叔母が母性的応答を繰り返し行っているが、Aは乳児期の課題を達成し、早期児童期へすすんでいる。コフート（1984=1995）は母親からの母性的応答が必要だと述べているが、必ずしも母親という血縁関係の人物から受ける必要があるというわけではなく、誰かが子どもの発達にとって必要な役割を果たすことが重要であると言える。また、両親の離婚についても同様のことが言える。一般論として、親の離婚が子どもに与える影響力についてはすでに論じられており、本論での調査でも、小学4年生時に発達段階の危機になりうるほど影響を受けている。しかし、小学5・6年生のときにはAの寂しさを共有し、支えてくれた担任という重要な他者によって、劣等感の危機が軽減されている。青年期や初期成人期においても重要な他者となっている人物は部活仲間や恋人であり、発達課題の達成に大きく影響を与えている。したがって、親の離婚によって子どもの発達に必ず問題が発生するとは限らず、重要な他者からプラスの影響を受けることができれば、親が非離婚の子どもと同じように発達段階をすすむことができると筆者は考察する。

本論の課題としては、誕生から現在までのデータであるため無数のキーワードが表れてしまい、カテゴリ化の正確性について改善の余地があると考えられる。中には繰り返し回数が3回以下のキーワードも存在しており、コレスポネンズ分析に利用できない為分析に使用しなかったものもあった。すべてのデータの中でより重要なキーワードを厳選したり、全てのキーワードをカテゴリに分類させたりするといった工夫が必要だと考えられる。また、本論では1人の人物について深く考察を行うことができたが、この調査結果が多くの人に

当てはまるものだと証明することができていない。今後は、この調査結果は親の離婚経験をもつ子どもたちの多くに当てはまると証明することが課題として挙げられる。

大学生 A については初期成人期までの発達段階に分けて分析と考察を行ったが、今後さらに健康的な自己愛を育み、次段階の成人期へすすむために、他者に心を開いて話すことを続けることで、まずは親密性を獲得してほしいと思う。そして、A 自身の健康的な自己愛を育むだけでなく、A の母が女性として生きることを認めることができれば、両親の離婚を心から受け入れた証となり、本当の意味で A が両親の離婚にとらわれることなく、健康的な自己愛を育むことができるであろう。

最後に、本論を執筆するにあたり、多くのご指導と助言をくださった立木茂雄先生に感謝しています。本当にありがとうございました。

1)対象喪失 近親者の死や失恋をはじめとする、愛情・依存対象の死や別離（肉親との死別や離別、失恋、子離れ、ペットの死等）。

## 参考文献

- ・Campbell,W K, 1999, “Narcissism and romantic attraction,” *Journal of Personality and Social Psychology*, 77:1254-1270.
- ・Erik, H Erikson, 1959, *Identity and the Life Cycle*, New York:International Universities Press. (=1987, 小此木啓吾訳『自我同一性—アイデンティティとライフサイクル—』誠信書房, 49-124.)
- ・Kohut, H, 1984, *How dose analysis cure?*, Chicago:University of Chicago Press. (=1995, 本庄秀次・笠原嘉藍訳『自己の治癒』みすず書房.)
- ・P・H・オースティン, 1991, 「自己心理学と健康の概念」A・ゴールドバーグ, 『自己心理学とその臨床』岩崎学術出版社, 70-93.
- ・安達喜美子, 1994, 「青年における意味ある他者の研究—とくに, 異性の友人(恋人)の意味を中心として—」*青年心理学研究*, 6:19-28.
- ・大石史博・福田美由紀・篠置昭男, 1987, 「ナルシズム的人格の基礎的研究(2)—ナルシズム的人格目録とPFスタディとの関係について」『日本教育心理学会第29回総会発表論文集』:536-537.
- ・上地雄一郎・宮下一博, 2004, 『もろい青少年の心—自己愛の生涯—』北大路書房.
- ・厚生労働省, 2015, 「人口動態統計月報年系(概数)の概況」, 厚生労働省ホームページ, (2016年11月17日取得,  
[http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai15/dl/gaikyou27.pdf#search=%27%E4%BA%BA%E5%8F%A3%E5%8B%95%E6%85%8B%E7%B5%B1%E8%A8%88+%E5%B9%B3%E6%88%9027%E5%B9%B4+%E9%9B%A2%E5%A9%9A%27](http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/jinkou/geppo/nengai15/dl/gaikyou27.pdf#search=%27%E4%BA%BA%E5%8F%A3%E5%8B%95%E6%85%8B%E7%B5%B1%E8%A8%88+%E5%B9%B3%E6%88%9027%E5%B9%B4+%E9%9B%A2%E5%A9%9A%27))).
- ・小此木啓吾, 1992, 『自己愛人間』ちくま学芸文庫.
- ・小塩真司, 2000, 「青年期の自己愛傾向と異性関係」『名古屋大学大学院教育発達科学研究科紀要』47:103-116.
- ・小西瑞穂, 2009, 「自己愛人格傾向と両親の養育態度との関連」『東海学院大学紀要』3:125-127.
- ・コトバンク, 2016, 「対象喪失とは」, Yahoo!辞書, (2016年11月26日取得,  
<https://kotobank.jp/word/%E5%AF%BE%E8%B1%A1%E5%96%AA%E5%A4%B1-187048>).
- ・佐方哲彦, 1987, 「自己愛人格目録(NPI)の妥当性に関する研究—Y-G検査およびMPI, MMPIとの相関から—」『日本教育心理学会第29回総会発表論文集』:538-539.
- ・総務省統計局, 2010, 「平成22年国勢調査」, 総務省ホームページ, (2016年11月17日取得, <http://www.stat.go.jp/data/kokusei/2010/users-g/wakatta.htm>).
- ・張愛子, 2014, 「大学生の自己愛傾向に関する研究:親の養育態度と友人関係との関連から」『学校教育学研究論集』29:1-13.
- ・中村晃, 2004, 「健全な自己愛と不健全な自己愛」『千葉商大紀要』42(1):1-20.
- ・野口康彦・櫻井しのぶ, 2009, 「親の離婚を経験した子どもの精神発達に関する質的研究—親密性への怖れを中心に—」『三重看護学誌』11:9-17.
- ・野口康彦, 2013, 「親の離婚を経験した子どもの心の発達—思春期年代を中心に—」『法と

心理』13(1): 8-13.

・宮下一博, 1991, 「青年におけるナルシズム (自己愛) 的傾向と親の養育態度・家庭の雰囲気との関係」『教育心理学研究』39: 455-460.